

【万葉集の基礎知識】

万葉集は日本最古の歌集

万葉集の成立は、奈良朝末頃（8世紀末）と考えられている。

＜万葉集という名の由来＞

- ①「葉」を「世」の意味に用いて「**万の世**に伝わるべき歌集」とする説
- ②「葉」を「歌」の意味に用いて「**万の歌**を収めた歌集」とする説がある。
- 成立は最後の歌が天平宝字3年(759)1月に大伴家持が詠った歌であることと家持が亡くなったのが785年ということから、奈良朝の終わりごろに完成したものと思われる。

●万葉集最後の歌（巻20－4516）

三年の春正月一日に、^{いなぼのくに}因幡国の^{ちやう}片にして、^{あへ}饗を^{くにのこほり}国郡の^{つかさら}司等に^し賜へる^{よごと}宴の歌

あらた ^{はじめ} 年はじめ ^{はつはる} 初春の 今日降る雪の いや重け吉事

右の一首は、守(かみ)大伴宿禰家持作れり。

- *新しい年のはじめの新春の今日を降りしきる雪のように、いっそう重なれ、吉き事よ。
- 歌の前に書いてある文を「**題詞**」または「**詞書**(ことばがき)」という。
- 歌の後ろに書かれている文を「**左注**」という。

■ 逐次付け加えられていった歌集

- 『万葉集』は全部で20巻だが、全部が一定の方針で一挙に編纂されたものではない。
元々成立を異にした巻々が大伴家持の手で整理・編纂され、その後も人の手が加わって今の形になったと考えられている。
- 『万葉集』の中で最も古い部分が巻1と巻2で、以後は逐次付け加えられていった複合歌集。

■ 全部で20巻・4500首

歌に付けられた番号は4516番までであるが、

- 重出歌、類似歌が約10首ずつ
- 一首に2つの番号が付いた歌(巻6-1020・1021)等ある。

重出歌の例: 巻4-488 額田王の近江天皇を思ひて作れる歌

君待つとわが恋ひをればわが屋戸のすだれ動かし秋の風吹く

巻8-1606 額田王の近江天皇を思ひて作れる歌

君待つとわが恋ひをればわが屋戸の簾動かし秋の風

原本は存在せず、現存するもので一番古いのは平安朝中期ごろの写本で、桂本、金沢本などがある。

■収められた歌の年代は約130年と長い

＜万葉の時代区分＞

第一期 （初期万葉）	舒明天皇即位 舒明元年（629年） 大化改新 645年 近江大津宮遷都 667年 壬申の乱 672年	629年 ↓ 672年	舒明天皇 天智天皇 額田王
第二期 （白鳳万葉）	飛鳥浄御原宮遷都 672年 藤原京遷都 694年 大宝律令 701年 平城京遷都 710年	672年 ↓ 710年	天武天皇 持統天皇 柿本人麻呂 志貴皇子
第三期 （平城万葉）	古事記成立 712年 養老律令 718年 日本書紀成立 720年	和銅3年（710年） 710年 ↓ 733年 天平5年（733年）	大伴旅人 山上憶良 山部赤人 大伴坂上郎女
第四期 （天平万葉）	平城復都 745年 東大寺大仏開眼供養 752年 天平宝字3年（759年）	733年 ↓ 759年	大伴家持 笠女郎 防人 卷20-4516 759年

■歌の作者は多く、階層も天皇から庶民まで様々

名前のわかる歌人だけで約500人。内、女性が約100人。

天皇	舒明天皇・天智天皇・天武天皇・持統天皇・聖武天皇 等
皇族	<small>ありまのみこ たけちのみこ くさかべのみこ おおつのみこ しきのみこ</small> 有間皇子・高市皇子・草壁皇子・大津皇子・志貴皇子 等
貴族	<small>なかまろ たちばなのもろえ ふじわらの</small> 藤原鎌足・橘諸兄・大伴旅人・大伴家持・藤原仲麻呂 等
官人	<small>やまべのあかひと かさのかなむら やまのうえのおくら おののをゆ</small> 柿本人麻呂・山部赤人・笠金村・山上憶良・小野老 等
僧侶	<small>さみまんせい はくつう</small> 沙彌満誓・博通法師・元興寺の僧 等
防人	<small>あさくらのますひと はせつかべのたりひと おさかべのむしまろ</small> 朝倉益人(上野国)・丈部足人(下野国)・刑部虫麿(駿河国) 等
女性	<small>ぬかたのおおきみ おおくのひめみこ ふじはらのぶにん いしかわのいらつめ かさのいらつめ</small> 額田王・大伯皇女・光明皇后・藤原夫人・石川郎女・笠女郎・ <small>おおとものさかのうえのいらつめ ひたちのをとめ よさみのをとめ</small> 大伴坂上郎女・常陸娘子・依羅娘子(柿本人麻呂の石見の国の妻)・ <small>するがのうねめ さみに うかれめかまふのをとめ うかれめはにし</small> 駿河媛女・沙彌尼・遊行女婦蒲生娘子・遊行女婦土師 等

■歌は相聞・挽歌・雑歌の3つが基本

そうもんか 相聞歌	互いに消息を交わしあうことで、主として男女の恋を詠みあう歌。
ぼんか 挽歌	死者を悼み、哀傷する歌。
ぞうか 雑歌	相聞・挽歌以外の歌。 主に宮廷関係の儀礼の歌、旅で詠んだ歌、自然や四季をめでた歌など。
その他	譬喩歌、羈旅歌、問答歌、東歌など。

●歌体

短歌	五七五七七	約4,200首
長歌	五七五七……五七七	約260首
旋頭歌	五七七五七七	約60首
仏足石歌	五七五七七七	1首
短連歌	五七五/七七(上の句と下の句は別人が詠む)	1首

■歌に詠まれている土地はほぼ日本全土

『万葉集』に出てくる土地は、北海道、青森・秋田・山形・岩手・沖縄の5県を除く日本全土に及んでいる。

歌に詠まれている地名数は約1200。(延べ約2900。)

大和の国(奈良県)で歌に詠まれている地名数は約300。

「奈良」という名がつくのは約50首

「吉野」という名がつくのは約60首

「春日」という名がつくのは約50首

(延べ約900。)

■歴史的な事件に関連した歌も多い【万葉集は歴史書でもある】

●有間皇子の謀反 (巻2-141・142 追悼の歌巻2-143・144・145・146)

いはしろ

え

まさき

磐代の 浜松が枝を 引き結び 真幸くあらば また還り見む (巻2-141)

*磐代の浜松の枝を結びあわせて神に無事を祈るが、もし命あって帰路に通ることがあったら、再びみることだろう。

●大津皇子の事件 (巻2-105・106 巻3-416)

いはれ

かも

けふ

ももつたふ 磐余の池に 鳴く鴨を 今日のみ見てや 雲隠りなむ (巻3-416)

*磐余の池に鳴く鴨を見るのも今日を限りとして、私は雲の彼方に去るのだろうか。

■原文はすべて漢字〈漢字文〉

『万葉集』は通常、漢字と平がなの混じった読み下し文で書かれたものを目にしているが、原文は漢字だけの文字表記によって書かれている。当時、自分の国の言葉を表す文字を持たなかったの
で漢字を借りて「やまとことば」を表記した。

- 万葉前期の歌は、漢字本来の意味を生かした表意文字と字音によって用いる表音文字の混じった歌が多い。万葉後期になると字音によって用いる表音文字主体の歌が多くなっている。
- 字音によって書かれたものは一字一音で、結果的には仮名文字と同じような機能を果たすことから「万葉仮名」とも呼ばれている。
- ただ、題詞と左注の原文は、漢文で書かれている。

●漢字の意味とは関係なしに一字一音で用いた場合 〈万葉仮名〉

原文	安須可河伯世久登之里世波安麻多欲母為祢弓己麻思乎世久得四里世婆
読み下し文 (巻14-3545)	明日香川 塞く <u>と知りせば</u> あまた夜も 率寝て来ましを 塞く <u>と知りせば</u>

●原文で見ると万葉人に掛け算の知識があった 一九九の用字一

例:「二二」と書いて「し」と読む。二×二=四(し) 〈原文〉如是二二知三 → かくし知らさむ

「十六」と書いて「鹿猪(しし)」と読む。十六=四×四(しし) 〈原文〉十六自物 → 鹿猪じもの

■一番多く詠われている動物は「ほととぎす」、植物は「萩」

動物	
1	ほととぎす 約 1 5 0 首
2	馬 約 8 0 首
3	雁(かり) 約 7 0 首
4	鶯(うぐひす) 約 5 0 首
5	鹿 約 5 0 首

植物	
1	萩 約 1 4 0 首
2	梅 約 1 2 0 首
3	松 約 8 0 首
4	橘(たちばな) 約 7 0 首
5	菅(すげ) 約 6 0 首

■日本は言霊の国

しきしま やまと ことだま さき
 磯城島の 日本の国は 言霊の たすくる国ぞ まま幸くありこそ (巻13-3254)

* 磯城島の日本の国は言葉の魂が人を助ける国であるよ。無事であってほしい。

この歌は柿本人麻呂歌集に出てくる歌で、日本では古来より言霊というものを信じてきた。日本人は、古代から言葉の霊力が幸福をもたらす国であると信じており、言霊が日本の精神文化の基礎にあったと思われる。

【 Written by 米谷潔 (奈良まほ

るばんりての介) 】